

資料渉猟余話

その66

先頃、稀観本『北原痴山』昭和26年・天龍社刊)とその稿本が南信州資料センターに寄せられた。当該の本も珍しいが、その原稿となればなおさらである。既に六十年以上経過しているのに、紙は黄ばみ、色はくすんで

いるが、執筆者入魂の筆跡は鮮やかに遺っている。この稿本は、痴山の信奉者であった飯田市伊賀良の故伊藤仁が所属していた。(子息、公平氏寄贈)翁は、若い頃から痴山を崇拜し、折々に揮毫等してもらっていた。だからこそ、この稿本を入手し、長年秘蔵してきたのであろう。

飯田下伊那の政治・経済・産業・教育・文化等のあらゆる方面に多大の影響を及ぼした巨人である。この本は、一言で言うなら、その痴山の足跡や功績を記した力作である。

多くの人が執筆した

原稿が遺ることから、本の紹介も含めて内容を概観してみる。刊行を機に、昭和23年12月5日、飯田市長久寺での木下照一の序文や口絵に続いて、まず八十年に及ぶ痴山の「年

稀観本『北原痴山』の稿本発見

鎌倉貞男

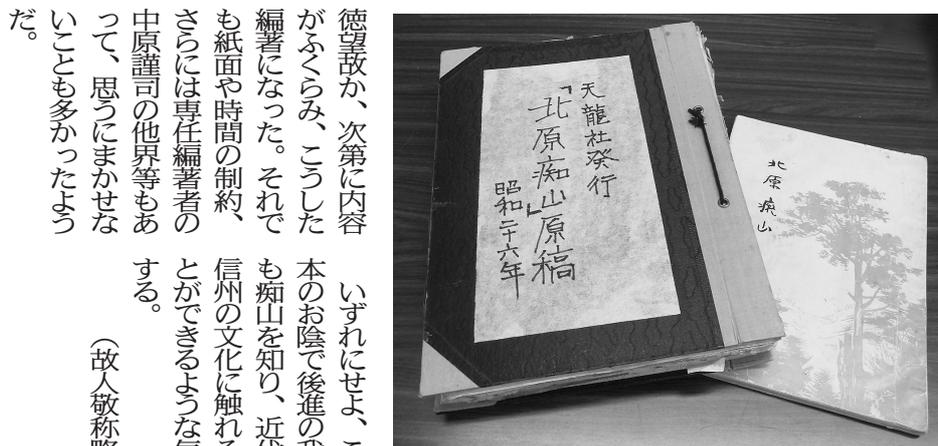
「譜」が掲げられる。これだけ見ても、例えば痴山は、多年旧上郷村長や県議員を、また衆議院議員を務め、中央や地方の政治に大きく貢献したこと等、いろいろなお話がわか

が痴山について記す。例えば、伊那地方史研究の権威市村威人は、郷土文化の推進者としての痴山を論じた。また、峽谷俳壇の代表者小林郊人は、痴山の俳句二百句ほどを示して、俳人痴山を語った。

さらに、衆議院議員を務めた中原謹司は、社会指導者としての痴山を述べた。その他、森本州平は痴山の幼時と生家の家風を、今村良夫は痴山の短歌についてそれぞれ説明を加えた。

その間に、郷土俳人27人による追悼句が並ぶ。作者は、小林郊人・久保田創二・稻垣陶

石等である。加えて、郡内外の俳人50人が寄せた追悼句もそれに続く。高浜虚子・白田亜浪・粟生純夫等の著名俳人である。



『北原痴山』の稿本と刊行された本

徳望故か、次第に内容がふくらみ、こうした編著になった。それも紙面や時間の制約、さらには専任編著者の中原謹司の他界等もある。いずれにせよ、この本のお陰で後進の我々も痴山を知り、近代南信州の文化に触れることができるような気がする。(故人敬称略)